

『夢』を拡げ、育てたい

元阪之上小学校校長
高橋 孝男

私は、およそ40年間小学校教師を続けてきた。

「あなたは先生が好きなんでしょう？」と、人様からよく聞かれる。

「…。」その返事はいつも曖昧なものであった。

『先生』、この恐ろしいほど神聖で、しかも人間的なあじわいのある言葉に引かれたのかもしれないが、人様に胸をはって言えるほどのものではなかった。しいて言うならば、生涯学習の入門期に、絶対に忘れることのできない『夢』を与えてくれた先生がいたことが、この道を選ばせた大きな理由かも知れない。

平成5年は、阪之上校が創立して120周年。私にとって今年は還暦。ちょうど、阪之上小校の半分、つまり、昭和の一桁から今日まで生きてきたことになる。

幸い私は、物^{もの}心^{ごころ}がついてから、片や児童として、一方は教師として、太平洋戦争を境にした戦前・戦後の教育に関わってきた。

私にとって、与えられたテーマ『これからの教育』は大きすぎる。私には、このテーマに答えられる力がない。残念ながら、体系だった学問もないし、ここに来ては、時間的な余裕もない。

だから、私は、過去50数年間の学校体験の中で、自分の感性でとらえ、人間として、教師として、自分自身の中に染みついた『教育に対する美意識』を下敷きに、『これからの学校への思い』を、少しでも読者がイメージを描きやすいように、かつて私が体験した具体的な事実を披露しながら、書き綴ってみたいと思う。

学問好きの日本人

日本人ほど、学問を大切にし、学問が好きな国民はいない。江戸時代、あの封建時代の最中でさえ、日本人の識字率は、80%を越えていたのではないかと推測している学者もいる。

『読み書き』『そろばん』が出来なければ、百姓であれ、町人であれ一人前には扱われなかった。だから、相当に貧しい暮らしの中でも、子弟の教育には熱心であったと言われなければならないだろう。

脇道へそれるが、修学旅行の引率で野口記念館を見学した際に、野口博士の母親しかさんの手紙を読んで、「しかさんが子どもの頃は、恐らく明治以前であったはず。しかもその頃の百姓は、貧しかったに違いない。なのに、読む人の心を打つ文と、片仮名混じりといえ、あれだけの文字を書くことができたとは、驚きである。」と、いつも思う。

実は私事で恐縮だが、私も大学に入ったとき、母から初めて手紙を貰った。やはり、片仮名と平仮名混じりであった。

私の母は大正の初めの生まれであり、うちがとても貧しく、兄弟も多かったのも、ほとんど学校へは行っていないと聞いていたので、びっくりしてしまった記憶が残っている。

文字ばかりではない。「たかお、おまえ、しらないとちへ行ってベンキョウするのだが、からだを大事にだいじにせい。なつやすみにかえったら、すぐ、干縄のうち（父母が住んでいる家のあ

る集落)に顔を出しなさい。」というような意味のことが書いてあった。

そのことを母に話すと、母は、何時も、「おら、子守や、うちの手伝いばっかさせられて、学校へなんざいくことできなかつたが、字、書けねばどしよもないと思って、手習いだけはなんとかしたさ。」と答えたものだった。

また、脇道にそれるが、私は、幼い時から、祖父母に育てられていたので、弟たちが、父母と住んでいるのを診て、「何で、おればっかり。」と、不満だったが、母の、この手紙を読んで、「あ、俺だって、お袋の子どもなんだ。」と、納得し、吹っ切れた思いをしたことを、今でも、昨日のこのように覚えている。

こんなつたない、私事からも、日本人の学問好きが、昔からだったと言うことが伺えるのではないだろうか。

この、学問好きの国民に、当時の明治政府が、学校を開くように命じたものだから、それは、火に油を注ぐような結果になったことはいままでもないだろう。

当然のことながら、学校で教えることは、お上(文部省)において決定され、システム化されたネットワークで県や郡、市町村に下ろされ、官公立の学校において実施されたのである。

かくして『西欧に追い付き追い越せ。』の合い言葉の下に、優秀な文部官僚主導の日本の伝統的教育のシステムが確立されたのである。

一方、長岡では『戊申の役』に敗れ、民百姓、侍までが明日の糧にも困る日々をおくっている時であり、戦後処理に大わらわであった。

当時、藩が困窮している最中、小林虎三郎の大英断により、三根山藩から贈られた見舞いの米百表によって「国漢学校」が創設されたことはあまりにも有名である。長岡の教育の発祥であり、阪之上校の教育精神の源でもある。

当時の教育がどのような形で行なわれたのか、私の知識と想像力では表現が困難である。ただ言えることは、長岡の人々もまた学問好きであった。

まず、教えようとする師の側は、「国を興し、地域を発展させるためには、学問を大切に、教育の振興に命をかけなければならない。」という、確固たる哲学を持って教育に携わっていたと伝えられている。

また、学ぶ側、すなわち生徒たちには、「当面している苦難を克服し、きびしい自己修練によって、身を立てよう。」とする自主不屈の精神が強かったことが忍ばれる。

国漢学校で特筆しなければならないことに、師弟の人間関係が緊密で、両者の間には『礼節と敬愛』精神で結ばれていたことであろう。このことは、現在の教育においても通じる、当然引き継がれ無ければならない大切なことではなかろうか。

『国漢学校』は、長岡藩の学校であり、当然、藩の費用で運営されていた。しかし、学ぶ生徒については、町や、近郷の師弟一般に解放されていた。ここに、長岡の先見的な教育風土を、伺い知ることができよう。

国漢学校そして後の阪之上校からは、明治、大正、昭和の歴史を飾る幾多の人材を輩出したことは、今更言うまでもないだろう。

世界に注目されている日本の教育

『西欧の文明に追い付き追い越せ』を合い言葉に、学問好きで勤勉な日本人は一生懸命勉強し、なりふりかまわず働き詰めに働いて来た。

気がついてみると、いろんな分野で世界に追いついたばかりでなく、「もう、欧米からは学ぶ

ことが無くなった。」ぐらいに思い上がるほど、科学技術や経済はじめ、いろいろな分野で、世界から注目され、世界のお金持ちの国に成長した。

とりわけ、日本の教育は、世界の国々から、「日本の科学技術や経済の著しい発展の背景には、どうも、日本の教育が、その役割を担ってきているのではないか。」と、大変な熱の入れようで研究をされるほど、高い水準に発展した。

いわゆる先進国といわれている国々が、日本の教育について研究を始めているのである。

例えば、アメリカの連邦教育省では、「日本の教育のレベルがこんなに高いのは、一体どこに原因があるのか。」ということで、3年間かけて研究し、報告書『日本教育の現状』にまとめている。

その冒頭に、「日本の教育が、世界の第一級の水準にあることは隠れもない。まさに、今日の日本の教育における幾つかの業績は、その経済の発展と同様、他に類を見ない。日本においては、9か年間の義務教育の間に、全ての子供たちに、読み書き・算数・理科・音楽・美術などの、質の高い、バランスのとれた基礎教育を施している。よって、その平均的学習到達度は、国際的に見ても高いレベルにある。」と、述べている。

昨年8月に訪問した、オーストラリアでもニュージーランドでも、日本の教育への関心は高かった。シドニーの教育委員長、グラハム・ドレイトン氏は、日本の教育を視察するために、もう、3・4回も日本を訪れているとのことであった。

また、ニュージーランドのオークランドの公立レムエラ・プライマリー・スクールのダマレル・サイモン校長も、9月には、大阪と神戸へ教育事情視察に出掛けるとのことであった。

このように日本の教育の優れているところは、戦後一貫して『学習指導要領』を制定し、教育の機会均等を国民に保証してきたことにあったと思う。

義務教育の機会均等というと、どこでも学校に入ることが出来るということと、入った学校の教育の中身や質が、全国どこでも同じであるということであろう。これが、日本の教育の優れたところであり、これまで、親達が学校を大切に、公教育を信頼してきた所以でもあると思う。

ところが、ここへ来て問題が起きてきた。

世の中が移り変わり、人々は、経済的にも時間的にも、ゆとりを求めるようになってきた。そのためにより良い職業を目指し、進学競争が激化してきた。したがって、これまで頼ってきた公教育だけでは満たされなくなり、受験産業が繁盛し、人間の価値を、知識の記憶量で序列をつけるようになってきた。

また、これは戦後の教育の成果だと思われるのだが、人々のものの見方や考え方が、多様で、大きな広がりを見せるようになった。当然、子供の暮らしも個性的になり、多様になってきた。

しかし、教育は、相変わらず、公教育全体のレベルを高めるという明治以来の姿勢で、行政のリードで進められてきた。そこで指摘されたのが、『教育の画一化』であり、『教育の硬直化』であることはいままでのない。

そのための歪みであろうか、ここまで来て、『校内暴力』『いじめ』『登校拒否』といった、これまではあまり見られなかった現象が、全国の小・中学校に広がり始めたのである。そして、そのことが『教育は弾力性・多様制』という、今日的な要請の根拠の一つになったのであろう。

公教育において、『教育の共通性』と、『教育の弾力性・多様性』という相矛盾する概念のバランスを成立させることは、相当難しいことである。しかし、日本の将来を見通し、

生涯を通して学習する社会

1 成熟した社会を目指す 21世紀

正直いって、21世紀がどんなになるのかは、私のつたない想像力で描くことはなかなか難しい。

これまで臨教審や、文部省は「21世紀は、現在より、もっと成熟した社会になるだろう。」と予想している。これは、たんなる予想ではなく、これからの日本の国造りのビジョンでもあろう。

今年の夏、ニュージーランドの教育事情視察に参加した際、ある1軒の牧畜農家を訪問した。

ご主人と奥さんの二人暮らしで、1.600頭余りの羊を飼って生計をたてていた。住宅も、羊毛加工工場もそう立派ではなかったし、使っているトラクターも車も随分と型式の古いものだった。

二人いる子どもは、今オークランドの大学へ行っているとのことであった。居間に案内されて驚いた。家具などは相当な時代物である。それが、ぴかぴかに磨きこまれている。居間の片隅には、古い木製の毛糸を紡ぐ機械がおいてあり、奥さんが趣味で毛糸をつむぎ、セーター等を編んでいるとのことであった。

私たち日本人の常識では推し量れない、広い屋敷内には大木に囲まれ、大木の下木には沢山のロードデンドロンすなわちシャクナゲが植えられていた。また、質素ではあるが、ご主人手製のプールがあり、庭の南側には、これまた、ご夫婦の共同作であるというの日本風の庭園があった。

「お金持ちではないが、二人で一生懸命働き、週末になるとキャンピング・カーで遠くへ旅をするか、庭造りをしたり、お菓子を作って、パーティーを開きお友達を招待して皆で楽しんでいる。贅沢は出来ないが、二人が一生暮らしていくには十分であり、毎日が充実している。」と、誇らしげに、話していたことが、印象的だった。

この視察で、三つの都市も訪問することができた。北島では、オークランドとロトルアであり、南島ではクライストチャーチである。どの都市も大変美しかった。自然との調和がきちんと保たれており、広い公園にはたくさんの樹木が生い茂り、美しい花が咲き誇り、そして、必ず、フットボールができる広大なフィールドが備わっていた。

日曜日になると、公園の中の小道や、山坂の自転車ロードでは、ヘルメットをかぶった子どもたちが喜々として、自転車スポーツを楽しんでいた。

これもクライストチャーチでの日曜日に、遭遇したことなのだが、古い大学の構内で、『のみの市』が聞かれていた。各自、思い思いの品物を持ち込み、大勢の観光客を交えて、人と人との触合いが、いとも自然に楽しそうに行なわれていた。

どの町も、川も樹木も自然のまま残されており、石造りの建物がよく調和し、町全体が公園のように美しかった。

これからの日本は、老人の多い社会になると予想されている。

この老人たちが、国の福祉にどっぷりと身をゆだね、町や村の空き地で、のんびりとゲートボールに打ち興じ、或いはカラオケや演芸会を楽しんで過ごしているだけの社会なんぞ、想像しただけで寂しくなってくる。

決してお金持ちではないが、それぞれの人々が、お国や、お上のお仕着せでない、自分の生きがいを持ち、心豊かで、自分自身の値打ちのある生き方や、よりよい暮らしを創り上げようと、生涯を通して、自ら学習を続ける社会。すなわち、生涯学習体系がしっかりした社会で、活力に

満ちた社会、こんな社会こそ、成熟した社会と言うのであろう。

2 これからの小学校教育の役割

現行の指導要領は、『新しい学力観』という言葉に代表されるように、公教育における『共通性』を大切にしながら、時代が要請する『弾力性と多様性』を、どう、バランスよく機能させていくかという命題のもとに生れたことは、先に述べてきた。

21世紀は、成熟した生涯学習社会が実現すると言う。そのイメージについては、垣間見たニュージーランドを例にとって、前の項で述べた通りであるが、この、生涯学習体系の中の、義務教育の初期、すなわち、小学校では、21世紀と言う時代に対応する人間に必要な資質や能力を育てることが、重要な役割であることは、今更、言うまでもない。

すなわち、一口で言うならば、『生涯にわたって、学習する能力とか、意欲を身につけさせる。』ということにほかならない。これまでのように、『知識・技能を、どう効率よく記憶させたり、トレーニングするか。』を重視するのではなく、『大きな夢を持ち、夢の実現を目指し、生涯にわたって、自分自身の生き方に必要な知識や技能を勉強し、練習し、自分自身を高めて行こうとする、自己教育力』をしっかりと身につけさせることが、小学校教育の重要な役割であると思う。

3 教育の質的転換 ー新しい学力観ー

一つの遊びや学習をきっかけに、つぎつぎと活動を発展させていくNくんにとって、阪之上での学校生活は家庭生活の延長であり、遊びであり、学習でもある。

1年生であるNくんの学校生活には、教科や領域といった枠もなく、時間的な区切りもない。

自らの欲求にもとづくまま、自由に思いをめぐらし、上げようとしている姿こそ、Nくんの身上である。

このような、Nくんに代表される1年生という子どもたちの良さを、このまま、本当にこのまま育てていきたいという願いをこめて…。

『阪之上校の実践』Nくんと「阪之上校」（高橋孝男執筆）P161より

20年前に、阪之上校に勤めたときのことである。いきなり、1年生を担当させられた。時の校長、丸山新七先生曰く、「高橋、おまえ、当然、1年生をもてるだろうな。」40才近くになって今更「1年生はもてません。」と言うのも癪だから「はい。」と言ってしまった。授業をするようになって、後悔したが、あとの祭りであった。

入門期の1年生は、どんな教科も一時間は持たない。仕事の速い子と遅い子の差が大きい。何から何まで違いが大きい。一番面食らったのは、勉強も遊びも一緒に、まったく未分化そのものであった。そこで、勉強が退屈すると、私はよく、三つ葉公園や中庭で一緒になって、遊んでいた。子供達は、生き生きと実に良く遊んだ。

たまたま、それを丸山校長が、にこにこしながら眺めていたことがあった。「やばい。」と思ったが、そのまま子どもと喜々として遊びつづけた。

後日、丸山校長に「高橋、おまえ、合科やってみないか。」と声をかけられた。「は、合科ですか。」「恐らく、教科の内容が、幾つか合わされてやること。」ぐらいに考え、「ええ、やっ

てみましょう。」と言ってしまった。知らないと言うことは恐ろしいことである。おそれたことを引き受けてしまったのである。

私の発想は単純だった。

「小学校の入門期である1年生は、まだ幼児と同じである。したがって、遊びと学習の区別や、教科の区別があまり無いが、大変活動的である。公園を探検したり、遊びを作ったりすることには大きな興味を持ち、全身で打ち込む。だから、1年生が好む遊びや冒険を彼等自身の目当てにすれば、社会科、理科、図画工作などの合科として、相当な効果があるだろう。」と言うものであった。

たまたまその時期に文化祭が開かれ、三つ葉会（児童会）の運営委員の企画で、体育館いっぱいを使った『大すごろく』が催された。それに参加した私のクラスの子どもが、「それを作って遊びたい。」と言い出した。「しめた。これだ。」と思った。

出来上がった単元が、『ちずわたり』であった。

教室いっぱいもある大きな学区の道路地図に、まず、自分で描いた自分の家を貼りつける。そして、自分の通学路に沿って、街路樹やお店、信号機などを作って、貼りつけていくのである。みんな真剣だった。

この活動で、子供達は、ふだん、何気なく見ていた自分の家から学校までの道すがらを、社会事象として、或いは、自然の変化として目をむけるようになったのである。この活動は、今で言えば生活科と言えなくもない。

すなわち、それまで『教師主導の知識や技能を教え込む授業』から、『自分たちの願いや、目的の達成のために調べたり、作ったりするという、子どもの側にたった授業』に替えて行きたいと願った、『低学年の授業の質的な転換を図る』試みであった。

この活動を、私たちは「合科」とは呼ばず、「教科の関連を強めた学習」と呼ぶことにした。

丸山校長は、この、つたない実践をひっさげて、時の『教育課程審議会』に臨み、かくして、次の学習指導要領に『合科的指導』が誕生した。

只、ここにきて心残りが一つある。

それは、丸山校長の後に着任した、石黒秀一校長に指摘されたことである。初秋の頃であった。石黒校長は、『阪之上校の実践』をお読みになり、「高橋、阪之上小学校の『地域総合活動』も『低学年の活動（教科の関連を強めた学習）』についてもよく分かった。だがな、一つ大切なことを忘れてるいることがある。それはな、阪之上小学校は、福島江に子どもを入れないじゃないか。あの川には、今、魚がうようよしているぞ。あれを手掴みさせるような活動が、どうして出来ないんだ。』と、おっしゃられた。最もなことである。福島江土地改良事務所にお問い合わせすれば実現可能なことである。やはり、『先見の明』であろう。

自然へのはたらきかけの重要性が叫ばれている今日、『水辺との触れ合い』も子どもにとっては大切な活動である。過去にも、現在にも、わが校には水辺での遊びが、極端に少ない。したがって、福島江、栖吉川へのはたらきかけが必要であったのではないかと、多少、残念である。

阪之上校には、総合学習或いは総合活動が育つ素地が昔から息づいていた。『伝統教育』しかり、『地域総合学習・活動』しかりである。

これは、阪之上校の伝統的な校風として、『何を教えるか』といういわゆる教師主導の伝統的な教育観より、子どもたちの自主・自発性を重視して、常に『何を育てるか。』という発想で、教育を推進してきたことによるものだと思われる。

4. 阪之上校で、『なにを育てるか』

○阪之上校教育の伝統』は？

「阪之上校は、伝統校だから…」よく、人様に言われる。

確かに、当時、藩校であった国漢学校から数えれば130年近くの歴史を持ち、『米百俵』で象徴されるようにその誕生もまた劇的であったことは間違いない。

じゃあ、「伝統は？」と聞かれたら、私たちはどう答えればいいのか。

私は、この長岡の、この地域が受け継ぐべき資質（池田正樹氏による）として、『気節』を大切にしたいと思う。したがって、「伝統は？」と問われたら、「それは、子どもにも、教師にもみなぎる『気節』だ。」と答えるようにしている。

○阪之上校の教育目標

(つよく かしこく あたたく)

人間と生命を尊重し、自主的で、気節に満ちた人間を育てる

○創造的な知性

○豊かな心

○ともに生きる社会性

○健康で活動的な心身

昭和52年に刊行された『阪之上校の実践』では、阪之上校の教育目標『人間と生命を尊重し、自主的で、気節に満ちた人間を育てる』を、

「『人間の尊重』『生命の尊重』は、全ての教育の基本である。また、人間として生きるものの共通の願いである。ともに生きる仲間を人間として認め、信じ、尊敬する。生命あるものに、限りない愛情を示す。など、小学校教育においては、調和のとれた豊かな人間の基礎となる心情や態度を育成していくことが大切である。」と解説している。

また、『気節』については、「『気節』という言葉は、自らの目標に対するねばり強い追求心、ことを処する毅然とした態度、節操、欲望に流されないきびしい自制心を内抱している。長岡の風土が生みだした価値の高い資質と考える。」と述べている。

この教育目標は、およそ20年前に検討され設定されたものである。さすがと言えさすがであるが、日本の将来を見通して、将来に生きる人間像と必要な資質を、「阪之上校の教育における思索や実践を、普通規模の公立小学校におけるこれからの教育のあり方にまで止揚したい。」と願い、創り上げたものである。阪之上校の先輩に脱帽である。

5 カリキュラムの見直し

今ほど、教育の質的転換が叫ばれているときはない。『知識伝達型』から、『自己学習型』への転換である。

子どもの心や身体全体、そしてあらゆる感覚を動員して行う活動を通して、『社会』とか、『自然』とか『人間』とかを総合的に、生きた学習をさせる。『知識や技能を、一斉授業で単に教える』というのではなく、子ども自ら、『調査したり、観察したり、実験をしたり、更には植物や動物を育てたり、いろいろな活動をさせ、その具体的体験の中で、学力を身につけて行く』こんな教育のはたらきを創出していかねばならないだろう。

生活科は、単に小学校の低学年の問題ではなくなった。新しい学力観の象徴である。阪之上小学校には、生活科のルーツとも呼ぶことができる地域総合活動等が、伝統を担いながらも、実践

には益々磨きがかかってきている。しかし、問題がないわけではない。限られた時間の中で、教科や特別活動の時間数の確保が難しくなっている。なかんずく地域総合活動は、いわゆる『ゆとりの時間』を大量に消費して実践されている現状である。そのために、日本人として必要な知識や技能、すなわち『基礎・基本』の習得時間を極端に少なくしたら、『教育の共通制』と『教育の弾力性・多様制』のバランスを崩してしまい、公教育の意義を損なう恐れがある。私たちは、阪之上校教育全体のカリキュラムを、子どもの状況を視点に、常に見直す謙虚さを持たなければならない。

教育における、『ゆとりと充実』叫ばれて久しい。かつては阪之上校もその一翼を担い、すでに、時程表を工夫したり、1単位時間を40分にし、午前中に5単位時間を消化して、放課後の時間を確保し『部活』に力をいれたり、土曜日はカバンのいらぬ日として教師と子どもが協同で創意・工夫して活用するなど、時間の弾力的に運用を取り入れた時代があった。

今や、生涯学習体系の一環として、月の第2土曜日だけであるが、『学校週5日制』が実施され、平成7年度からは、月2回の実施が予定されている。ゆとりある児童自身の自由な生活時間を保証しようとする『学校週5日制』が実施されたために、学校が益々忙しくなってきたのは、何のための『ゆとり』か分からなくなってしまうのではないか。真剣に考えなければならない問題である。

総合活動や、体験活動で得ることのできる『何を育てるか（何を教えるか）』と教科が担っている基礎・基本『何を教えるか（何を育てるか）』の調和が大切であることを忘れてはいけない。

時々、脇道にそれて誠に恐縮だが、これもニュージーランドで体験したことである。オークランドの、ブレントウッド小学校を訪問した際、一人の低学年の教師の『週プラン』を見せて貰った。分厚いバインダー式のノートに、毎週のカリキュラムがびっしりと書き込まれていた。もちろん、その中には、個をどこまで高めたいか、その内容も、色分けしながらメモされていた。

これから、阪之上校にとって益々大切になるのは、カリキュラムの再構成である。それも単に、分厚い、形式的な冊子（指導計画と称する本）になっただけのものではない。むしろ、学校全体の計画は、なるべく簡略化し、そのエネルギーを、担任の『週プラン』作成に向けるようにすべきではなからうか。学級担任の個性が生かされ、個々の子どもに目を向けた、生きて働くカリキュラムにするような方策を模索していかなければならないだろう。

昔も今も変わらない教師の役割

1 『夢』を膨らませ、育てる教師

教育は人なりとよく言われる。

世の中が移り変わり、教育の中身や教え方がいかに進歩しようと、教育が『人が人に教える』という営みである以上、師弟の間に人間同志としての敬愛の情が通い合わなければならない。したがって、教師の人間としての魅力や、情熱が教育に及ぼす影響が大きいことは言うまでもない。

特に、子どもが、『夢』を抱き、その実現のために勉強したり、自分を高めようとする意欲や態度が育つのは、教師の優れた教育理論でもなく、高度な教育技術や、教育施設・設備ばかりではない。教師の豊かな人間性と、感動を与えることのできる表現力ではないかと思うこの頃である。

私が学んだ県北の山あいの分教場は、学校としては、決して条件がよいとは言えなかったし、

戦後学んだ新制中学もまた、恵まれた学校ではなかった。

ただ、文明や文化的な生活に触れることが少なかった私たち当時の子どもにとって、『自分の夢を持つ』大切さを教えてくれた、忘れられない先生との幸運な出会いがあった。

誠に恐縮な話だが、つまらない私の小・中学校体験を紹介することにより、今も昔も変わらない教師の役割について考えてみたい。

(1) やまいりの『荃太分教場』

私の学んだ小学校は、山の分教場であった。新潟県の北の端、岩船郡三面村立三面小学校荃太分教場である。この分教場には、岩崩・荃太・干繩の三つの集落の子どもが学んでいた。この三

つの集落を、村の人は『三が^{あざ}』と呼び、『三が^{あざ}』からおよそ4軒川下に下った村の『あらわ(中心部)』の本校で勉強している子どもたちは、『三が^{あざ}』を幾分蔑んだ言い回しで『やまいり』と、呼んだ。子どもの頃は、『やまいりのもん』と呼ばれるのが、何よりいやだった。

もともと、『やまいり』は、やっぱり、深い『山入り』だった。

高校に入って、蒲原の広い原っぱに立ってみて、初めて、その空の広さに驚いたのである。なにしろ、山入りの空は、川の両側に連なる山に囲まれ、帯のように細く見えていた。

さて、また横道にそれてしまったが、分教場の子ども数は以外に多かった。私の、昭和8年生れの学年、すなわち昭和15年に入学した仲間の数は、男10人、女8人の18人であった。私の学年は少ないほうであったから、1年から6年生の数は、恐らく120人ぐらいは、いたと思う。

分教場の先生の本数は、男先生と女^{おなご}先生で、分教場に棟続きの住宅に住まいして、10数年も勤めている夫婦の先生であった。

男先生が4年生、5年生、6年生を担当し、女^{おなご}先生が1年生、2年生、3年生を受け持つのが普通であった。

私は先生の長男の隆司君と同年だったために、幸か不幸か一年生のときは、男先生に受け持たれることになった。したがって、5年生と6年生と同じ教室で勉強した。もちろん変則的な組み合わせであった。

今思うと、私と隆司君はよく喧嘩をしたので、そのためであったのだろうし、隆司君にしっかり勉強させるためだったと思う。話はそれるが、彼は、5年生になると、中学(旧制の)に入るため『あらわ』にある本校へ通うようになった。

男先生は一年生の私たちに、とても厳しかった。5年生、6年生に教えているときは、たつぷりと、漢字や計算の練習を与えた。少しでも騒ごうものなら、たちまち愛の鞭がとんできた。でも、男先生は話がとてもうまかった。一年生の私たちが漢字をたくさん書いているとき、5年・6年生は、国史(日本史)や地理を勉強していた。男先生の語りが素晴らしかった。一年生ながら、早く自分の仕事をすませて男先生のおもしろい話に耳を傾けていた。

(2) 『話し方』の名人

その頃、本校や、町の学校のことは良く分からないが、荃太の分教場で勉強したことは、主に、低学年では、国語と算数などだった。中でも忘れられないのは、女先生がやらせた『話し方』であった。山入りの子どもたちが苦手なのが、この『話し方』であった。昔話でもいい、昨日ので

きごとでもいい、なにを話してもよかった。女の子は、いつも堂々と標準語を真似て話をするのができた。私にとっては、『話し方』は地獄であった。1年生から3年生まで大勢いる中で話をするほど嫌なことはなかった。いつも、自分の名前が呼ばれないように祈っていたのだった。

でも、順番は容赦なく回ってきた。みんなの前に立つと、もう駄目。なにを話したらいいか分からない。顔を赤くして、只もじもじしているだけだった。

ある日、とうとう話しをしなければならぬ羽目になった。「孝男、あんた、本が好きだね。」「…。」「昨日、何という本を読んだ。」「小国民の友…。(小学館の雑誌)」「小国民の友の、何がおもしろかった。」と、女先生が質問をたたみかけてくる。「密林の冒険」「あ、そう、それ話して。」つられて、とうとう小声で話さなければならなくなった。みんなも喜んで私の話に、耳を傾けるようになった。「話をするって、こんなことなんだ。」と、自信が出てきた。先生も、友達も『孝男の話』を待ちどおしく思うようになったようだった。

このことがきっかけになって、益々本が好きになり、お陰で私は、いろいろな昔話や物語のレパートリーを増やし、『話し方』の名人になった。

(3) 吉田先生との出会い

戦争も日本の敗色が濃厚になったことを、子どもごろろに感じられるようになった。6年生に進んだ春のことである。分教場に大変なできごとが起こった。

男先生が病気になって、長く休むことになり、代わりの先生が着任したのである。先生は吉田先生といった。吉田先生は、町の女学校4年を卒業したばかりの、若い少女のような先生だった。おそらく、教育実習を終えたわけでもなく、ほかの学校で先生をしたわけでもない。全くの素人の先生であった。嬉しいことに、先生は私の本家に下宿することになった。その頃、先生を下宿させることができる家といえば、『三が字』では、私の本家しかなかった。本家の先生の部屋は二階で、何時も、おそくまで明りが灯っていた。

町からやってきた吉田先生も、『山入り』の貧しさには驚いたことだろう。学校に赤ん坊を背負って来る者がいるわ、小学校に上がる前の弟や妹を連れてくる者、いろいろだった。授業中に赤ん坊が泣けば外にあやしに出なければならぬし、おむつも変えなければならぬ。赤ん坊と一緒に泣き出す女の子もいた。でも先生は『在郷』の子どもや生活になれるため、一生懸命であった。

先生は習字が得意であった。みんなに習字のお手本を書いてくれた。それを大切に大切にしながら、みんな、真剣に練習した。

分教場では、高学年になると、工作の時間に、よく竹細工をやった。女先生の発案であった。

竹箒を作ったり、竹の簾を編んだり、難しい竹トンボを作ったりで工作の時間が楽しみであった。

吉田先生は、工作はあまり得意では無かったが、失敗しながらも、みんなに見聞きして頑張っていた姿が、印象的であった。

また、吉田先生は縄跳びがとても旨かった。先生は『2重跳び』を飛んで見せた。みんな『2重跳び』を見たのは初めてだったので、驚いてしまった。だから、先生をなおさら尊敬してしまった。みんな一生懸命練習した。女の子はすぐにできるようになった。私は縄跳びも、2重跳びも、あまり得意ではなかった。でも、なんとかできるようになった。

思春期を迎えようとしている少年たちにとって、吉田先生は、とてもまぶしくて、まるで神様のような存在だった。先生に気にいられようと、みんな一生懸命勉強した。更に読書の楽しみを身につけたのもこの頃だった。

ある日、先生に、『15少年漂流記』という1冊の本を借りた。それまで、私の読書といえば、少年雑誌を貪り読むことぐらいだったが、この厚い、長い読み物の経験で、私の読書生活は大きく広がった。「世の中に、こんなに胸がおどる想像の世界があったのか。」と凄い感動であった。

「せめて、6年生を卒業するまで、分教場にいてほしい。」という、みんなの願いも空しく、吉田先生は、2ヶ月の期間が終わると、本校へ行ってしまった。そして、男先生が帰って来た。分校は、昔ながらの学校に戻った。

吉田先生は、それから私の本家の家から、本校へ高等科の生徒と一緒に、歩いて通っていたが、忙しかったのだろう、あまりお話もできなくなった。

もし、だれかに、「あなたの恩師は。」と聞かれたら、私は、ためらわずに「それは、小学校の時、いろいろ教えてくれた吉田先生だ。」と答えるだろう。

おそらく、吉田先生は、私たちのクラス18人ばかりでなく、ほかのクラスの子どもたちにも、「世の中は広いこと。」「私たちの知らない夢のような世界があること。」「読書の中に広がる、凄い想像の世界こと。」など、たくさん教えられたと思う。藤代栄も、栄も、妙子も文作も、みんな「勉強しなきゃ、いつまでも炭焼きにしかねれない。」と思っていたに違いない。

「孝男、勉強しないと、駄目だよ。」という、あの優しい声が、今でも耳元に、懐かしく蘇ってくる。

2 個を認め、励ます

(1) 高等科進学そして新制中学へ

しかし、戦争のため、極度に貧しくなった『三が字』の同級生からは、本校の高等科に進んだ者は18人中、私を含め、文作と、妙子と、よし子の、男2人、女2人の4人でしかなかった。

高等科の2年生になるとき、学制が新しくなった。いわゆる、6・3・3・4の現在の学制になったのである。だから、4人は、中学の2年に編入することになった。夢にまで見た中学生になったのだが、学校は代りばえしなかった。それまでの小学校の教室を間借りして、3年生と一緒にだった。つまり、中学にはなったが、相変わらず、複式であった。

先生といえば、小学校からきた先生は、たった一人、他は、朝鮮、満州、カラフトなどから引き揚げてきた先生や、軍隊帰りの怖い先生ばかりであった。

だが、先生方も、少ない生徒も、とても真剣であった。学用品、教材、何から何迄不足していたが、生徒は、知識欲に燃えていた。

何より欲しかったのはやはり、『本』であった。兄や、従兄弟の本棚から、叔父の読み古した本や雑誌を手当たり次第借出しては、お互いに回し読みした。とにかく、みんなハングリーであった。

一方、6年生を終えて、町の中学(旧制)に入った人達(本校の同期生たち、隆司君もいた)が、朝、バスに乗って通学する姿に出会うと、大きな憧れと屈辱感みたいな複雑な気持ちを持った。只、心の片隅には、「負けたくない。」という感情がふつふつと沸き上がったことも、事実であった。

そして、いよいよ中学3年になった。

妙子とよし子が学校をやめた。2年で終われば、高等科を卒業したことになるからである。私の家でも、中学3年に進むことに、相当なためらいがあった。だが、祖父は納得してくれた。

(私は、祖父母に育てられていた。)
「これからは、新制中学ぐらいは出てないと…。」というのが先生方や、村の識者たちの考えであった。

(2) 中村先生と『絵』

私はそれまで、『工作』は好きで得意だったが、『図画』が好きでなかったし、あまり得意ではなかった。分教場の時は、キュウリやカボチャのような静物画ばかりだったし、高等科1年生の時は風景のばかりであった。

中学2年になったときのことである。丁度その頃、朝鮮から引き上げて来た、『ちょうせんあめ』とニックネームの図画の先生がいた。時は農地解放の嵐が吹こうとする最中であった。役場から頼まれて『農地解放のポスター』を2年、3年全員で描いて応募することになった。驚いたことに、私の作品が1等賞に選ばれたのである。『ちょうせんあめ先生』に凄く褒められた。その時はまだ、自分が絵がうまいなどは全然思ってもみなかった。

中2の秋のことである。岩船郡の小・中学校の児童生徒の作品展に出品するために、写生画を描くことになった。私は、それまで人があまり描かなかった、村の家々の後ろに聳え立つ鷲が巢山(村のシンボル)』を描いていた。

その時、後ろでじっと見つめていた中村先生が、「孝男、おまえの絵はいい。将来、絵に関係することで、飯が食えるかもしれんぞ。」と、感心したような顔つきで言うのである。「へ、おれ、絵がうまいのかな。」と、ちょっぴり自信を持ち始めたのがこのときからであった。

それからは、図画の時間が来るのが楽しみになった。

いまでも、あの頃の風景に出会うと、なんとなく胸がときめく。

教員になってからの私は、図工教師の端くれに名を連ねるようになった。

恐らく、絵、すなわち『形(フォーム)』に関係する、なんらかの趣味が、私のライフワークになることだけは、間違いない。まさに、『仕事は楽しみながら、道楽は命懸け』である。その事を思うと、私に声をかけてくれた中村先生に感謝せずにはいられない。

(3) ミネルバ会

中学3年の夏休みのことである。私たち中学3年生の人生に大きな影響を及ぼす機会が訪れた。

その頃、私達の田舎の村で、中学校(旧制)以外の上の学校に進む人は大変少なかった。その少ない先輩たちが、軍隊からぞくぞく復員して来た。旧制の大学生、専門学校生、師範学校生などが私たちの学校に顔を見せるようになった。グラウンドで、テニスをやったり、体育館でピンポンに打ち興じている姿は、私たちにとって、とても眩しかった。

この人達が、『ミネルバ会』という会を組織して、夏休みに、村の新制中学の2年生・3年生を集めて勉強させることになったのである。村始まって以来の大事件だった。その頃の中学生(或いは高等科の生徒)の夏休みと言えば、家の手伝いをするか、遊ぶか、勉強と言えば学校から出された、ちょっぴりの夏休み帳の宿題しかなかった。

ミネルバ会の会長は、その頃文理大学の学生であった本間忍先生(新潟高校長で退職後予備校の校長、明訓高校の校長をした)であった。

開校の挨拶で本間氏は、「この会のミネルバという名前は、ギリシャ神話に出てくる学問の女神、ミネルバからとったものである。日本は、戦争に負けた。だが、これからは学問の時代になる。学校の制度も新しくなり、新制中学ができた。この勉強会で力を付けて、みんなも上の学校を目指してほしい。」と言う意味のことを力説した。

みんな、新しい学問に対しては飢餓の状態であった。紹介された本を貪るように回し読んだ。新しい知識をたくさん知ることができた。これは、ほんとのカルチャーショックであった。

一生懸命勉強した。2週間は、あっという間に過ぎてしまった。初めて味わった充実感であった。

この会に参加したことにより、何か自分の将来に希望が持てるようになった。

ちなみに、この年、私たちの学年14, 5名のうち、新制の高校へ入学したのは、全日制へは4人。この中には、今、村上第一中学の校長佐藤忠もいた。定時制高校へは、私を含めて、確か4・5人入ったったと思う。

その後、定時制高校2年から、全日制高校2年に編入試験を受け、夢にまで見た『高校』に入学できた。この頃から教員になる夢は、更に膨らんだ。

生涯学習体系の入門期における教育の究極的な役割は、個が、自分の生涯を通して自分自身の生き方を追い求めようとする基礎的な力を育てることにある。したがって、教師が、個に働き掛けるとか、援助或いは支援するという事は、これまで、述べてきた、私のきまりの悪い経験のように、教育の日常で、自然に、さり気なく、目の前の『個を認め、個を生かすこと』にあるのではないか。

個が、ふとした感動で自分自身に気づく。そうした教育の積み重ねこそ、人間としての個の、生涯を通して学習する意欲や態度の基礎を育てることになるのではないだろうか。

家庭と地域そして学校と

この頃、家庭や地域社会の教育力が低くなったといわれる。したがって、その分、学校で教えなければならないことが増えてきて、大変忙しくなったこともまた事実である。

この語りの終章では、このことについて考えてみたいと思う。

(1) 家庭の教育力

最初に、家庭の教育力について考えてみたい。

現在の家庭の教育力は、大勢の識者が嘆くように、本当に低いのであろうか。現在の家庭の教育力が低いということは、昔の方が現在より高かったというのであろうか。

私は、そうは思わない。確かに、私たち大人の目を見て、乱れた生活態度や、低年齢化した青少年の非行が、昔は考えられなかったような衝撃的でリアルな形で私たちの目に飛び込んでくる。

では、昔は、青少年の非行や、世間から受け入れられないような生活を送っている若者はいなかったのかというと、そうではない。

私の生まれた山村のようなところでも、『つっぱり』はいた。『マドロス』や『やくざ』の服装して、腹巻きにピストルならぬ『どす』をさして、肩で風を切って歩いて、村中のひんしゅくを買ったり、酒を飲んで喧嘩を吹っ掛けては人様に怪我をさせたなどという話はざらにあった。

この頃も、「あいつの家庭はどうなってんの。」といわれたものであった。

結局、今も昔も、ごく少数の者が、『人としてのしつけ』が、「一体、どうなってんの？」と問題になるのであると思うのだが。

もし、本当に教育力が低くなったのであれば、その一つの要因は、お上、すなわち、行政と学校にあったのかもしれない。

それは、戦後増えた『教育の目標と内容』をみるとわかると思う。例えば、『生活指導の内容』一つとっても大変である。基本的な生活習慣と称して、頭の前から爪先まで、更には、朝起きてから、夜、寝るまで、すべての行動の様式がきちんとマニュアル化され、家庭ですべき事まで、皆一律に指導されてきた。家庭は学校の決まりがあれば、安心であった。全て『おまかせ』であった。

良く考えてみれば、学校は、何のことはない、家庭で教えなければならないことまでも、みんな奪ってしまっていていい子になって、「忙しい、忙しい」といつてきたのである。

これからは、学校が抱え込んだ、家庭でやるべきことは、家庭に返し、学校はもっとスリムに

なって、役割分担をはっきりさせることによって、家庭の力も自ずと上がって米ると思う。

(2) 地域のシンボルの再発見

次には、地域社会の教育力について考えてみたい。

昔は、それぞれの集落（或いは町内）には、必ずシンボルがあった。

わたしの生まれた『荃太』の集落にもシンボルがあった。それは、鎮守様の境内にある康申様の大銀杏であった。子どもの村中清掃の際にも、大人の村仕事の時の集合場所でもあった。秋にともなると沢山の銀杏の実もたわわに、子どもたちのおはじきになったり、おやつになったりで、自慢のシンボルであった。

鎮守の森は、子どもたちの恰好の遊び場であり、鎮守さまの広間は、大人たちのコミュニティーの場であった。子どもたちは、ここでの遊びをとおして、善きにしろ、悪きにしろ、厳しい、集団のルールや、その集落の持つフォーム（美意識）を身に着けていった。

親たちは、ここで遊んでいる分には安心して、餓鬼大将に、小さい子の子守を託した。ちなみに、ここで遊ぶ分には、子どもたちは、乳飲み子から、高等科の2年生まで平等だった。

もし、危ない遊びや、よくないことをしていたところを見つけた場合は、どこの家の子どもでも、厳しくしかりつけたものだ。程度によっては、必ずその子どもの家庭に連絡した。

大人みんなが、自分たちの集落の子どもは、みんな、集落の『宝』として大切にした。男の子は、数え年が15才になると、必ず『若い衆仲間』に入れられ、お餅をついて祝って貰った。ちなみに、女の子は『おなご衆仲間』に入れられた。

ここではまた、先輩達から、礼儀作法から、村の習慣・しきたり、冠婚葬祭にいたるまで徹底的に教え込まれた。

戦後、新しい風として、社会教育の重要性が叫ばれ、これまでのコミュニティーは、公会堂や公民館にとって改われ、地域が担っていた子弟の教育は、これまた役所や学校主導の新しいやり方に変えられてしまった。この、「日本的な文化大革命により、当然の報いとして、地域共同の教育力が低下した。」とみるのは、間違いであろうか。

ここまで変わった世の中を、むかしに戻りたいなどと大それたことは言わないが、私はそれぞれの地域に、コミュニティーのシンボルを打ち立てたいと思う。

阪之上校学区は、或いはそれぞれの町内は、何を選ぶだろうか。

町内のシンボルのもとで、町内の大人全員に、「町内の子どもたち全員を、自分たちの『宝』として育て慈しむ。」という心が、共通に生れさえすれば、地域の教育力など、すぐにでも取り戻せると思う。その阪之上学区の伝統に期待したい。

(3) 役所、学校は『がまん』の一字

先に述べたように、役所や学校は、思い上がりを捨て、これまで地域や家庭から取り上げてきた、「役所にしたがっていけば…。」「学校が教えてあげる。」と、何から何まで引き受けて来たものを、この際、全部、家庭や地域に返してしまう。役所は経済的な援助を。学校はスリムになって、新しい教育に専念してほしいと思う。

地域にしても、家庭にしても最初はぎこちないと思う。しかし、少し時間が掛かるかもしれないが、何ごとも我慢であると思う。私は、日本人、中でも長岡の大人たちの英知を信じて疑わない。

おわりに

男先生も、女先生も今はすでに故人となって久しい。

吉田先生もご退職してもう10年以上になろうか。私が教員を志したとき、教員になってから、これまでの節々に、必ず、手紙で励ましていただいた。ある機関紙を覗いたら、中村先生は米寿をむかえたそうなの。

そして私も還暦。自分の教え子たちに、どれだけの『夢や希望』を与えることができたか、まったく自信がない。今となっては如何ともしようが無い。

しかし、私に、『大きな夢』を描く楽しみと、いつも自分自身の生きざまを見つめ、少しでも『美しい形（フォーム）』を求める喜びを教えてくれた先生方との掛け替えのない出会いがあったということは、本当に幸せだった。

また、教員になってからも大勢の素晴らしい先輩、同僚と出会った。たまたま、阪之上校にかけの願いを、過去の出来ごとを実例として記述したため、阪之上校で教えを受けた校長先生のみを实名で書かせてもらった。まだまだたくさんの校長先生や教頭先生に出会い、教えていただいた。紙筆の都合上、割愛させていただいた。失礼の段を心からおわびを申し上げたい。

まだまだ書き足りないような気がするし、総べてを書き尽くしたようにも思える。

教職が終わるとなると、やはり感傷的になるのだろうか。文が随分冗漫なものになってしまった。残念ではあるが、こんなところが私の限界なのであろう。お許し願いたい。

「校長先生、好きな内容で、好きなだけ書いてください。」という教頭はじめ研究担当の諸君に励まされ、これまでの教職人生の中で、こだわりつづけてきた信仰にも似た思いを、好き勝手に書かせて貰った。ありがたいことである。

ある職員にいわせると、相当変わった校長であると言う。嬉しいかぎりである。その、変わった校長に、凄いチャンスと喜びを与えてくれた阪之上校の職員たちに感謝しつつ筆を置くことにする。

平成6年3月4日 阪之上校校長室にて